

# 奈良 いのちの電話

2019  
秋  
第378号

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp

## 特集 子どもの声に寄り添って



消しゴムはんこ作品集「奈良の秋」より「天銀杏」

きぬ 作

このころの 秋の朝明に 霧隠り  
妻呼ぶ鹿の 声のさやけさ

万葉集 詠み人知らず

## 風鐸



秋本番。奈良公園は恋のシーズンだ。オス鹿は、ぬた場と呼ばれる水たまりで体を泥まみれに汚し、自分のおしっこを体に塗りたく

り、においをつける。なんて汚いと人が眉をひそめても「ほっといてくれ、それが鹿界のフェロモンだ」とオス鹿はのたまうに違いない。

周りはライバルだらけだ。オスたちは角を突き合わせて熾烈な闘いを繰り広げ、勝ったものだけがメスにプロポーズをする。強いオスだけが何頭ものメスを

周りにはべらせ、面倒を見る。

大半の人が勘違いしているが、奈良公園のシカは野生である。野生ならではの行動が奈良公園という身近なところで見られるということは、とても幸運なことなのだが、裏返せば、野生の鹿にとってこれらの行為が邪魔するものは敵だ。例えば狙いを付けているメス鹿の前をたまたま人が横切っただけで、オスがその人を攻撃し、大けがを負わせる場合がある。

今、これらの事故が急増している。最近、鹿を目当てに奈良公園を訪れる外国人観光客が相当増えた。一見、かわいくてペット感覚で接する人が多く、鹿せんべいを出し惜しみしてかまれる、鹿の生

態を知らずにオス鹿に体当たりされてけがをするなどの事故が増えている。「どうにかしろ」という人も多いが、どうにもできない。野生なのだから。

まさに野生の鹿と人間が共生して暮らしてきたのが、世界で唯一奈良なのだ。鹿は人の都合で生きてはいない。人でないから鹿に文句も言えない。その様子を見るにつけ、相手の立場を知ることの難しさと大切さを思う。自分の都合が通じない相手といかにトラブルなく触れ合うか。人として鹿から教わることは多い。どうか千年後も人と鹿が穏やかに暮らす奈良でありますように。(佳)

座談会

子どもの声に寄り添って



昨今子どもの虐待死事件やいじめ等による自殺が連日のように話題になっている。警察庁の統計によると全国的には自殺者数が減少しているが、奈良県では特に10代の女性の自殺が増加しているという状況がある。子どもたちの間にもインターネットが普及し、いのちの電話にかかってくる子どもの相談はそれほど多くはないが、性被害や虐待、いじめ、思春期の心や体の悩みなどさまざまな相談が寄せられている。私たちがより多くの子どもたちからのSOSを受け取り、その声に寄り添っていくために大切なことは何なのかをあらためて考える機会として、8月4日（日）に座談会を開催した。

コーディネーターとして元公立学校教員で臨床心理士、当協会養成委員の浦純子氏を迎え、これまでチャイルドラインなら、奈良すこやかテレフォン、インターネット（メール）相談、そして奈良いのちの電話で子どもの相談に携わってきた方々8名で語り合ってもらい、その内容をまとめた。

10代の相談で印象に残っているものは？

最近の10代からの電話で気になるのは性被害や性的虐待に関する相談です。特に家族や親族からの性的虐待には心を痛めています。子どもの話をよく聴いたうえで、児童相談所や警察にも相談できるということを伝えることもあります。子どもが自分からそういうところに相談しないで、何度もいのちの電話にかけてくるのはどうしてなのかなと思っています。インターネット相談では、親の離婚や再婚による義理の親や兄弟姉妹との関係でつらい思いをしている相談が多くなっています。

被害を受けている子どもに寄り添うためには？

性被害に限らずいじめの問題などでも、子どもは困っていることだけをポツリポツリと話し始めます。本当に聴いてく



れるのだろうか、わかってもらえるのだろうかと思いながら、勇気を振り絞ってかけてくるのです。相談員は、困っていることだけに絞らず、どんな状態の中で生きているのかなども温かい雰囲気の中で包みながら聴いていきます。そうすると家族が見えてきたり、子どもの別の面が見えてきたりします。子どもが話してくれるかどうかはわかりません。たずねても言わないかもしれないですが、それはそれでいいと思います。問い詰めるものではないのですから。

児童相談所や警察の他にも、各都道府県に性暴力被害者をサポートする専門機関、奈良県には『奈良県性暴力被害者サポートセンター NARAハート』や『公益社団法人なら犯罪被害者支援センター』があります。匿名で相談できる場所もあるので、相談機関の情報を正確に把握しておくことは相談員にとって必要なことです。しかし、子どもはそういう専門機関のことを教えてもらっても、そこに相談することで家族関係が壊れたり、学校に行けなくなることを恐れて、現状から抜け出せないでいるのです。とても孤独だと思います。その気持ちを相談員が受けとめることが大切だと思います。

いのちの電話が子どもたちにとって安全で安心できる場であるためには？

評価をしないで一生懸命に聴いてくれる大人が電話の向こうにいるということが大事です。いのちの電話は匿名でかけられるので、安心できない環境、厳しい状況のなかにいる子どもが、最初の窓口としてかけてきます。周りの人には言えないことや本音をいのちの電話では出せるかもしれないので、しっかり受けとめることが大切です。そして、どんなことがあったのかということだけでなく、子どもの育った環境などの背景も聴きながら、その奥にあるその子の気持ちを一つずついねいに拾っていくのです。さらに、未来に向かってほしいことや、どう生きていきたいのかということも聴けたらいいと思います。子どもだからうまく言えないこともあります。どの子にも未来があって、前に向かって行こうとしているのですから。

電話をかけるところがある、自分のことを心配して話を聴いてくれる大人がいる、ということが生きる力になればいいと思います。「よく電話してくれてたね」「よく頑張ってるね」「あなたは間違っていないよ」と受けとめ、寄り添い、子どもが本当に自分のことをわかってきていると思えるま

で気持ちで繋がりたいものです。自分のことが話せる安全で安心できる場を体験することが、一歩踏み出す力になっていくのではないかと思います。

## 子どもが電話で話しやすいようにするには？

今の子どもたちは電話をかけることは少ないし、メールもあまりしません。ほとんどがLINEでのやり取りという時代になっています。チャットを用いての相談に取り組んでいる機関もあり、話すことが苦手な子どもにとって大事なツールになります。私たちは子どもの発する生の声を通しての関わりを大切にしたいと思っています。チャイルドラインでは、子どもと年齢の近い学生の相談員が電話を受けると会話が弾むこともありました。大人の相談員は子どもと年齢差があるので、少しだけ高いトーンで話すというのいいのかもしれませんが、大人にはそれぞれ生きてきた経験があるのでそれはそれでいいところもあると思います。いずれにしても相手がどんな世界にいるのかこちらはわからないので、「教えてくれる？」「聴かせてくれる？」という感じでゆっくりといねいに聴きます。

子どもは言語化する力がまだまだ弱いので、中高生でも行動化してしまうことが多いです。自分がどういう気持ちなのかかわからないので、気持ちを聴いてもなかなか言わないし、言えないのです。いじめの場合、言うと自分が傷つくから言えないというのがあります。「…したんやね」「こんな感じなのか」と言葉にしてあげて、「その時どんな気持ちでしたの？」「それ一緒に考えようか」と寄り添います。言えない思いと一緒に抱えていく時間が貴重で、結論は出なくてもそれが私たちの大事な仕事かなと思います。ちょっとでも伝わったなと思えたら、子どもは安心できるかもしれません。そういうふうに関わり、ちゃんと向き合ってくれる大人に出会えたら、わかってくれる人が自分の周りにもいるかもしれない、自分にも何かできるかもしれない、という前向きな気持ちが生まれて明日につながるのではないのでしょうか。

## コーディネーター 浦氏より

子どもは自分だけで自分を造るものではなく、相手から返ってきたものを取り込みながら自分を造っていきます。ニコッとした顔が返ってきたら自分は大丈夫で、怖い顔が返ってきたら自分は受け入れられていない、というように世界を見ながら自分を固めていきます。だから相手から返ってくるものがとても大事です。安心できる大人からの言葉は子どもの人生を支えていく力、明日を生きていく力になります。何度も電話をかけてくるのはここを求めている、受けとめてほしいという意味があると思います。相談員一人ひとりが多少違う感じ方・色がありながらも支えることが繋がって、面として支えていきたいものです。思春期の子どもの相談は、その子の人生に一瞬だけ関わっているということ思いながら、将来を見越しながら聴くことがとても大事ではないかと思えます。

(Y・K) (A・Y)

## 情報化社会のなかで考える

# 出会い 18

## 出会いと別れ ～ Fさんとのこと ～

臨床心理士 東野 成昭

「こんにちは、初めまして東野と申します。」

「こんにちは、Fです。わざわざすみません。」

Fさんとの出会いはこんな挨拶から始まりました。

当時の私は身障センターの指導員として身体障害者の方々の支援を行っており、在宅の方々の社会参加を促すための家庭訪問もそのうちのひとつでした。

Fさんは、弱々しいながらも落ち着いた口調で自分の障害の事を話し始めました。

「僕はねえ、近所で起きた火事を見ようと塀に上って、そこから落ちて頸椎を骨折したんや。二十歳の時やった。それから20年。首から下にマヒがあって、手は少し動けど肩から上にあげるのは無理。何とかご飯は自分で食べることができる。」

「今一番したい事って何ですか？」

「自分一人で外に出たい。ゆったりと風呂に入りたい。昔やっていたサッカーもしたい。その他いろいろあるけど無理なことばかりや。」

「一人では無理でも、誰かが手伝えれば何とかなることもあります。うちのセンターには寝たままでも入ることができる風呂があります。週に1回でも広い風呂に入りますよ。それが外に出る機会にもなります。」

障害を負って約20年、通院以外に殆ど家の外へ出たことがなかったFさんが、外の世界へ一歩踏み出したわけです。

入浴サービスを開始して2ヵ月後、「東野さん、僕なあ、電動の車いす申請するわ。電動車いすに乗れたら、一人でセンターに行けるし散歩もできる。」

その後のFさんは、電動車いすでの外出はもちろんのこと、作業所作りなどを手掛けていかれました。その頃、こんな話を聞いたことがあります。

「スポーツセンターまで行くのに、健常者やったら1時間で行けるのに車いすだと2時間かかる。理由が分かる？」

「エレベーターの事？」と答えると、

「そう。近所の駅にはエレベーターがない。車いすで30分かけてエレベーターのある駅まで行く。やっぱりおかしい。声を上げないとあかん。」

Fさんを通して改めて社会の矛盾に気づかされました。

初めての出会いから12年目の秋、Fさんから突然電話があり、「東野さん、僕ねえ、ガンが見つかったの。来週から入院して手術するわ。退院したらまたよろしく頼むな。」

春を待たずにFさんは逝ってしまいました。

初めての出会い以来、Fさんにいろいろなことを教えられました。障害を負うということ、生きていくということ、生きていくということ etc.

Fさんはどうだったのでしょうか。

「東野さんと出会って…。」今はもう語り合うことはできません。